令和３年度資料小展示⑨　　2022.1.5～2. 24

囲碁・将棋の狂歌　～本因坊算砂（ほんいんぼうさんさ）～

今回の展示では、江戸時代の囲碁・将棋の名手、本因坊算砂が著した囲碁と将棋の狂歌を紹介します。

本因坊算砂は囲碁の名人を輩出した本因坊家の始祖です。江戸幕府は、慶長17年（1612年）に碁打ち・将棋指し8名に対し、初めて禄を与えましたが、本因坊算砂もその内の一人でした。その算砂が元和3年（1617年）3月に、囲碁・将棋における心構えなどを説いたのが今回の狂歌で、彼の言葉でそれぞれ11か条ずつ語られています。人生訓にも通じる本因坊算砂の言葉を味わってみてください。なお、彼の自筆とされる原本は京都の寂光寺に所蔵されています。今回は、毛利家に伝来した写しを展示します。

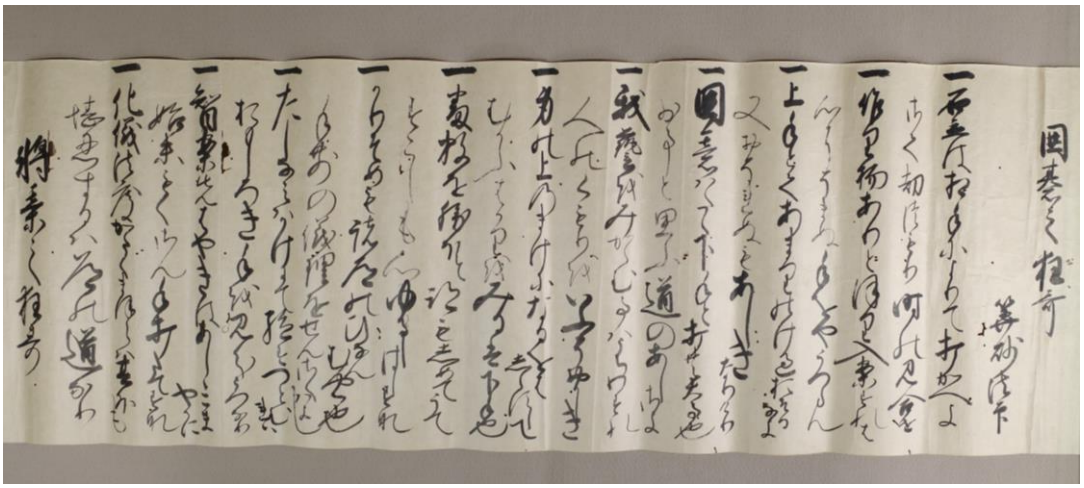
※途中展示替えをします。

（前期）1月5日（水）～1月23日（日）「囲碁の狂歌」

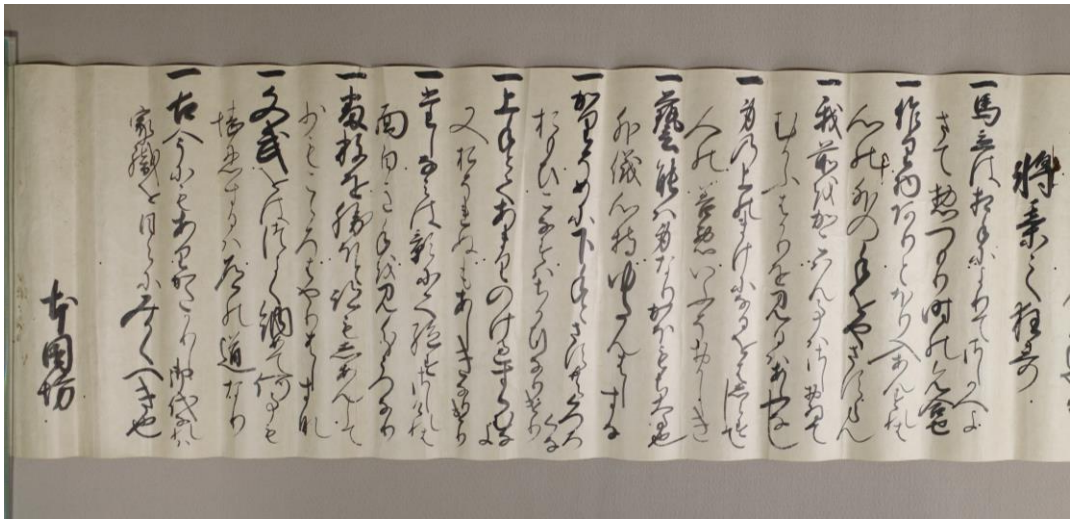
（後期）2月8日（火）～2月24日（木）「将棋の狂歌」

展示史料：「囲碁・将棋之狂哥」（毛利家文庫遠用物近世前期 2520）

囲碁の狂歌



将棋の狂歌



囲碁之狂歌

算砂法印

一　石立(いしだて)は相手によりて打かへよ

さて劫(こう)つもり時の見合せ

一　作り物ありとほり入案(案ずれば)すれは

心にそ(染まぬ)まぬ手をやう(打つ)らん

一　上手(じょうず)とてあまりのけ(気過)過(恐る)おそるなよ

又おそれぬ(恐れぬ)もあし(悪しき)きなりけり

一　囲碁ハたゝ下手(へた)と打つ共大事なり

少事と思ふ道のあし(悪し)さよ

一　我芸をみかゝ(磨かむ)む事ハうち(打ち忘れ)ワすれ

人のくもり(曇り)をいふ(言うぞ)そおかし(可笑しき)き

一　身の上のま(負け)けになるをは(ば)しら(知らずして)すして

むかふはかり(向こうばかり)を見るは下手也

一　番数を勝ほと跡(後)もしめてうて

すこしも心ゆるしは(ば)しすな

【大意】

囲碁の狂歌

布石は対戦相手によって打ち替えなさい。そうして、劫になった時の情勢の見極め、これが大切である（柔軟性のある序盤と勝負所での深い読みが大事ということか）。

「詰碁の例題にあったなあ」と答えを強く欲し頼ろうとすると、それに惑わされ、かえって満足できない手を打ってしまうだろう（人に頼らず自分の頭で考える事が大切）。

＊作り物＝詰碁。算砂自身、『本因坊碁経』という定石と詰碁の書を編さんしている。

＊ほり入＝「欲（ほ）り入」ヵ。「欲る」は願い望むの意。また、「入」は補助動詞。せつに、深くそうするの意。

囲碁の上手が相手だからといって、それを気にしすぎて、恐れてはいけない。しかし、恐れないのも、これまた悪いことである。

囲碁は下手と打つことも大事である。つまらない一局だと疎かにするのは悪いことだ。（能楽を大成した世阿弥が著した『風姿花伝』にも、類似の「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」という言葉がある。）

自分自身の技芸を磨くことは忘れておきながら、他の人の曇り（欠点）を指摘するというのは滑稽なことである。

自分が負けてしまうことには気づかないで、相手方ばかり（攻めばかり）を見るというのは下手がすることである。

番数を勝ち進めている時こそ、残る対局では気を引き締めて打ちなさい。少しも気持ちを緩めることなどあってはならない。

＊ばし＝副助詞。上の語を強める。～など、～なんか、の意。

一　かりそめも諸道のひなんむやくも（非難）（無益）
　　手前の儀理をせんさくハよし（詮索）

たとえわずかでも、他の芸道を非難することは良くないことである。自分自身が（碁打ちとして）行うべき道を探し求めるのが良いのである。

一　たしなミハかけにて絶す（嗜み）（陰）（絶えず）
　　おもしろき手を見分つなり（面白き）（打つ）（努むれば）

囲碁を嗜む上で大切なのは、人知れず日々研鑽することである。そうすれば、面白い手が見分けられ、打てるようになるのである。

一　智案先はやきはあしゝこまやかに（早き）（悪しし）
　　始末もくさん手打たてすな（目算）

早合点することは良くないことである、始終、きめ細かく目算することが大切である。決して良さそうに見える手に飛びついて打ってはならない。

一　化儀法度かたくまほらハ其外も（けぎはっと（固く））（ぼ）
　　堪忍するハ道の道なり

仏の教えや法度を固く守るのであるならば、その他の事においても耐え忍ぶというのが、道の道というものである。

＊化儀＝仏が衆生を教化し導く方法。

＊まぼる＝守る

将棋之狂歌

一　馬立は相手によりてさしかへよ（駒立）
　　さて惣つもり時の見合せ

駒組みは対戦相手によって指し替えなさい。そうして、勝負所での見極め、これが大切である（柔軟性のある序盤と勝負所での「詰むや、詰まざるや」の深い読みが大事ということか）。

一　作り物ありとほり入あんすれは（欲り入り）（案ずれば）
　　心の外の手をやさすらん

「詰将棋の例題にあったなあ」と答えを強く欲し頼ろうとすると、それに惑わされ、かえって心外な手を打ってしまうだろう（人に頼らず自分の頭で考える事が大切）。

＊作り物＝詰め将棋。

＊ほり入＝「欲り入」カ。囲碁之狂歌参照。

一　我前をかこハん事ハさしおゐて
　　むかふはかりを見るハあふなし（危なし）

自陣を守ることは二の次にして、向こうばかりを見る（攻めばかりを考えるのは）危ないことである。

一　身の上のまけになるをはしらすして
　　人の善悪いふそおかしき

自分が負けることには気づかないで、あれこれと人の善し悪しを言うのは滑稽なことだ。

一　芸能ハ身なりかほもち（顔持ち）大事なり
　　外儀（げぎ）心持ゆたん（油断）は（ば）しすな

芸能においては、身なりや表情も大事である。立ち居振る舞いや心の有り様に決して油断などあってはならない。

＊外儀（げぎ）＝仏教用語。外面に現れた威儀や立ち居振る舞い。

一　かりそめに下手とさす共くつろくな
　　おもひこなすハちかひなりけり

将棋の下手とちょっとした将棋を指す時でも気持ちを緩めてはいけない。その一局を軽視するというのは間違っている。

＊思いこなす＝ばかにする。軽視する。

一　上手とてあまりのけ過（気過）すくむなよ
　　又おそれぬもあしきなりけり

将棋の上手が相手であると、それを気にし過ぎてすくんではならない。しかし、恐れの気持ちを持たないのも悪いことである。

一　たしなミ（嗜み）は影にて絶すさしけれは
　　面白き手を見分うつなり

将棋を嗜む上で大切なのは、人知れず日々研鑽することである。そうすれば、面白い手を見分け、指せるようになるのである。

一　番数を勝ほと跡もしあん（思案）して
　　少もこゝろはやりは（ば）しすな

番数を勝ち進めている時こそ、残る対局では落ち着いて考え、少しも気持ちをせかすようなことなどあってはならない。

一　文武をは（ば）つよく納めて何事も
　　堪忍するハ道の道なり

文武をよく修得し、何事においても耐え忍ぶというのが、道の道というものである。

一　古今にもありかたかりし（有り難かりし）御代なれハ
　　家職を日々にみかく（磨く）へき也

今は、これまで無かったような有り難い時代であるので、（それを感謝し）日々、碁打ち・将棋指しとしての家業を磨くべきである。

[illegible]